

# 大学の資源を活用したコンテストが果たす役割 ～「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」の経年変化から～

林 香織

マス・コミュニケーション学科 専任講師

佐藤 毅

マス・コミュニケーション学科 教授

## 要 旨

本研究は、2011年度から行われている本学主催の「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」の5年間の応募状況の経年変化と、コンテストの意義を考察するものである。応募総数が5年で2万件を超え、毎年、団体応募するリピーター校や、1人で大量の作品を応募する投稿者の存在が確認できた。本コンテストは、創作の場として機能しているだけでなく、高校では創作指導に時間を費やし、大学では評価、鑑賞に時間を費やすという、連携関係が存在している可能性が示唆された。

**キーワード：**創作活動、高大連携

## はじめに

2011年度から本学が主催している「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」も、2015年度に5年目を迎えた。応募総数も累計2万件を超え、日本各地からの応募を数えている。このコンテストの趣旨は「高度情報化社会に生きる現代の高校生が、日常のコミュニケーション手段である携帯電話を用い、静かに落ち着いた心で物事を見つめ、心の奥底から湧き上がる感動を、韻文で表現する場」を提供することにある。

一方、大学における日本語力の低下が指摘されており、多くの大学で、初年次教育における日本語力養成が、リメディアル教育といった観点から導入されるようになった。本学では、開学以来、初年次教育には力を入れており、「基礎ゼミナール」「文章表現」「ことばと表現」といった科目を必修として、日本語力強化につとめてきた。本稿では、こうした背景を持つ本学が主催する韻文コンテストの実施報告だけでなく、大学の資源を活用した、高校生の日本語教育に果たす大学の役割について考察していく。

## 1. 研究背景

大学における日本語力養成に関する先行研究は、リメディアル教育の立場からのものが多く見受けられる。いかに問題点を改善するカリキュラムとして落とし込むかが、議論の焦点であるため、各大学が提供するシラバスを見ると、概ね、原稿用紙の使い方や言葉の使い方といったベーシックなものから、文章の要約などを経て、レポート作成へ導いていくという授業内

容になっている。本学でも、1年生の前期必修科目である「ことばと表現」では、文章の基本構造の理解に始まり、レポート作成を着地点としている。大学においては専門性の追求のために、何か特殊な日本語力を要するかというと、そうではない。例えば、塚越は、理工系大学生に必要な文章力について考察し、「文章表現法」という授業のシラバスで取得すべき3つの能力を①客観的な事実に基づいたレポートが書ける、②社会情勢をふまえた小論文が書ける、③就職活動における自己アピール文が書ける、と説明している(塚越, 2013)。これは文系の本学にもそのまま当てはまる、身につけさせたい能力である。客観的な事実に対して自らの考えを記す、これが学生には大変難しいらしく、レポートに躓く学生は「感想」と「意見」の違いの書き分けが出来ない。「～だと思う」「～のように感じる」という言葉で、意見を帰結させようとする傾向にある。

これは大学生に特有のものではない。テレビ番組の街頭インタビューを見ていて奇妙だと感じるのは、「面白い」「楽しい」「嬉しい」といった形容詞で受け答えを終わらせる人の多さである。逆に「～だと理解している」「～だと考えている」などの意見を述べる人は圧倒的に少ない。むしろこれは、テレビ局による編集の結果なのだが、形容詞を語尾とする物言いで、レポートは完成させることができない。

大学生の日本語力低下の要因の一つは、語彙力のなさや理解力だという指摘がある(佐藤, 2009)。馬場らによると、文字離れも去ることながら、「受験や成績評価が知識を問う形のテストで行われてきたことから、試験に合格するための記憶技術として語彙の蓄積がされてきている」ことが原因なのだという(馬場ら,

2011)。またこれに関連し、高松は高校で課される作文は、大学の求める論理的文書作成とは異なることを指摘している(高松, 2006)。つまり、テストという形で示される語彙力チェックにより、感情を含めた表現は暗記するものとなっていく。

しかしながら大学では、暗記した語彙を駆使して、論理的に自分の考えを説明することを要求している。これを乗り越えるためには、いくつかのステップが必要になることは明白である。秋山はこうした現状に対し、「日本語ラーニング」を高校に導入し、高大連携の形でステップの構築を試みた結果、「大学教員が高校生に対して講義するという一方向で単発の高大連携では、高校と大学をつなぐことは困難である」ことを見出した。

このような現状の中、本学主催の韻文コンテストのような創作の場はどのように活用され、その役割は何かであるのか、検討していくことにする。

## 2. コンテスト応募数にみる経年変化

図1は年度別の応募件数を示したものである。過去5年間での応募総数は、20,571件で、最も多い2014年度には、5,673件の応募を数える。各年度で、応募数にばらつきがみられるが、初年度に比べて、応募量は確実に増加してきている。

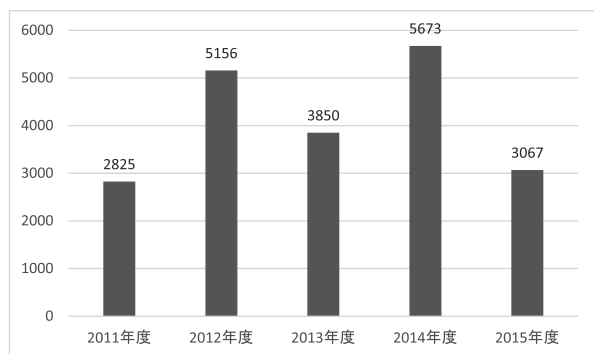


図1 年度別応募件数 (件)

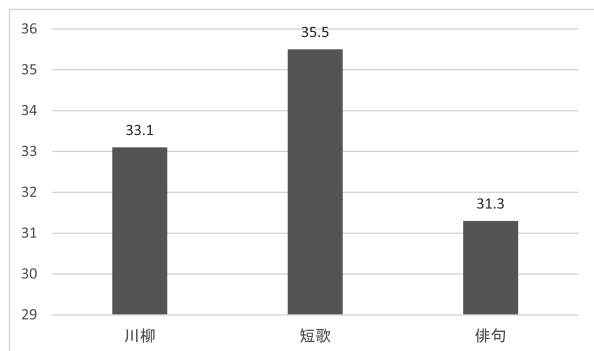


図2 部門別応募状況 (%)

一人で大量に投稿する投稿者の存在も確認できている。2012年度に東京都の3年生の男子生徒が333作品、2011年度に兵庫県の3年生女子生徒が229作品、2014年度に北海道の2年生女子生徒に221作品を投稿して頂いた。このような大量投稿者の言葉を紡ぐ能力には驚嘆するばかりだが、平均でも3.1作品の応募となっており、複数作品の応募は珍しくない。

応募の部門ごとにみると、最も多いのが短歌で35.5%、次いで川柳(33.1%)、俳句(31.3%)と続く(図2)。2年前までは、俳句の方が川柳を上回る応募状況であったが、逆転した。

年度別に応募部門をみていくと(図3)、年度による有意差(p<.000)はあるものの、特定の傾向を示すわけではない。短歌の応募は落ち込んでいたが、ここ2年で一気に増加した。短歌と真逆な傾向にあるのが、川柳の応募数である。選考の視点として応募要項では、短歌部門「情景や感動を高校生の視野から、いかに表現しているか。また、表現技術、内容や調子」、俳句部門「言葉の省略や飛躍及び言外の余韻をいかに表現しているか。季語や切れ字などの約束ごとがまもられているかなど」、川柳部門「高校生らしいフレッシュなセンスとユーモアが表現されているかなど」を挙げている。応募部門ばらつきの一因は、こうした選考の視点あると考えられる。図4に示したように、個人応募は圧倒的に短歌が多いのに対し、団体応募はす

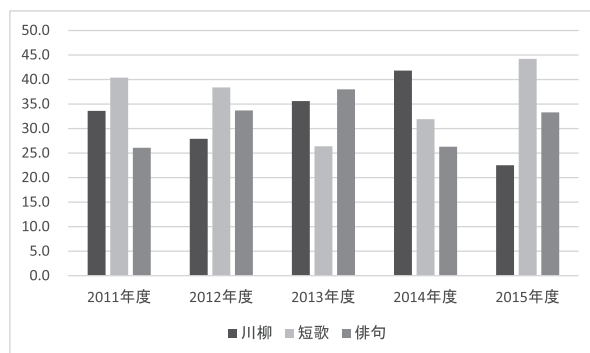


図3 年度別、応募部門の割合 (%)

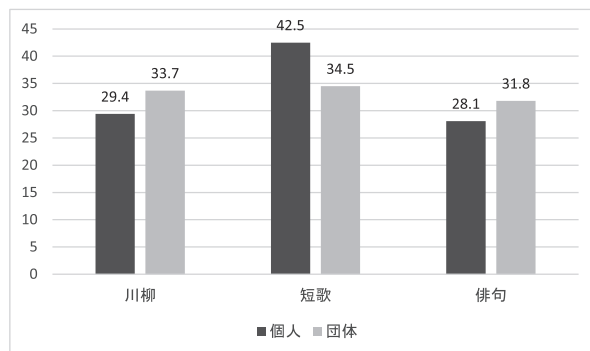


図4 応募区分と、応募部門の割合 (%)

すべての部門にまんべんなく応募がある。個人的な創作を行った結果、応募するには、短歌が最もハードルが低いことがわかった。一方で、団体応募が各部門に平均的に分散しているのは、とりまとめている教諭がおり、川柳や俳句といった別部門の指導の成果と受け止めることができる。

応募者は45都道府県に及び、北海道から沖縄県まで幅広い(図5)。ただやはり本学所在地である千葉県内からの応募が最も多く累積で3,245件となっており、東京、埼玉、など隣接する都県からの応募が続く。応募件数の多い都道府県の上位20は、距離的に離れていても、この5年間欠かすことなく毎年のように団体応募としてたくさんの作品をお送り頂いている高校が複数校存在している。毎年恒例のイベント、作品作りの時期の目安としてとらえてもらうことが、本コンテスト主催の動機付けにもなるため、継続的に応募をしてくれる高校があることは非常にありがたい。

応募者の学年をみたものが図6になる。なお、応募者のうち0.3%の学年は欠損のため、不明とした。1～3年生までそれほど差はない。

年度別に応募者の学年をみると(図6)、1、2年生の応募状況に変化がみてとれる(p<.001)。開始から4年間は1年生の割合が減少し、2年生は増加傾向を示していたが、2015年度に再び1年生の応募が増加している。このように応募学年が年度ごとに異なっていることから、本コンテストは、学年に縛られないプログラムと位置付けることができる。元々、コンテストの応募締切を夏の終わり(2015年度は9月18日)に設定し、夏休みの課題として高校に実施頂くことを想定している。大学の夏休みは長く、高校までにはない長い休みを持って余す学生も多い中、高校生の頃から、夏休みを利用して、創作活動をしたり、自分の感情表現を磨くといった行動の基盤作りをして欲しいという願いから、設定されたものである。実際、応募される作品の語彙を分析したところ、「夏」に関連するキーワードが多く抽出されており(林・佐藤他,2013)、夏

休みの課題として機能している可能性が示唆された。

### 3. 受賞作品に関する考察

次に、受賞作品に関する鑑賞、考察を行っていく。

2015年度の最優秀作品及び優秀作品は特筆すべき側面がある。例えば、俳句部門優秀賞「夏祭り差し出した手を引っ込める」(聖光学院高等学校、上原陸)や同部門入選「浴衣着た君の隣に他の人」(長崎県立猶興館高等学校、田中翼天)、同部門入選「君が好き言われぬままに過ぎた夏」(福岡県立久留米筑水高等学校、白石理子)、短歌部門佳作「夕立に隣の君が呟いた『すぐ止むかな』傷つく私」(青森県立青森高等学校、稲見ののか)、川柳部門入選「好きです。と花火の音が重なって」(鹿児島県立明桜館高等学校、千竈結花)などは、エネルギッシュな夏を謳歌するよりもどこか寂しく夏をとらえている。

テンプレートのように若さと夏を同列に置きながら、高校生の明るさを賛美するような風潮に現実の高校生は一石を投じている。つまりエネルギッシュで光り輝く時代にこそ影も強くなるのだろう。古い小説であるが、柴田翔の「されどわれらが日々」(昭和39年初版)の一節に「年をとったと言うには、あまりに若い年齢だが、やはり年をとったのだろう。私たちの世代は、きっと老いやすい世代なのだ、その老い方は様々であるとしても。」とある。時代は巡って無邪気な若者像の背後に影が意識されつつあるのかも知れない。

短歌部門最優秀作品である「授業中ふとした時に君の名を書いては消したため息ひとつ」(東京都立鷺宮高等学校、河原優花)に漂う「ため息ひとつ」という語感がそれを象徴する。また、同部門優秀賞「この想い君に届けと的を射る伸びゆく矢だけ静かに見つめる」(山梨県立韮崎高等学校、守屋結加)にある「静かに見つめる」という末尾に寂しさが漂う。俳句部門最優秀「天高しぐらり頬杖5時間目」(沖縄県立八重山商工高等学校、鷺尾玖美)の「ぐらり」という表情に

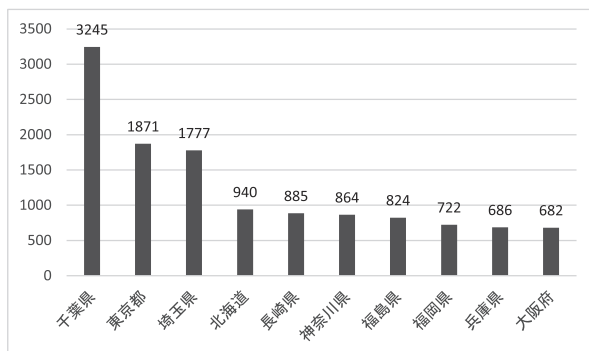


図5 都道府県別応募件数、上位20(件)

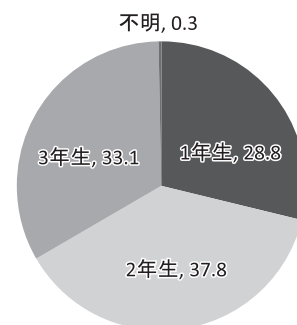


図6 応募者の学年分布 (%)

寂しさを突き抜けた退廃感すら見る事が出来る。同部門優秀賞「気の早いとんぼが庭に迷いけり」(千葉県立船橋夏見特別支援学校高等部、三浦久雄)は、エネルギーな夏の中にいち早く秋の気配を「とんぼ」に表現し、「迷いけり」と自らの苦悩を表現する。川柳部門最優秀賞「レポートはこれで片付く Wikipedia」(聖光学院高等学校、上原陸)や同部門優秀賞「壁ドンはいくメンだけが許される」(鹿児島県立明桜館高等学校、高橋舞)などは川柳特有の滑稽味の背後にこの世代の影を見出せる。

ここ数年の作品を見ながら、データが示すとおり若いエネルギーの発露としての作品が多数を占めてはいるが、徐々にその背後に広がる影へと視点が動いているように思われる。

#### 4. 日本語教育との関連

先行研究から明らかなように、教育の現場としての大学では、学生の日本語力低下を実感せざるを得ない状況が多々あるが、こうした韻文コンテストの応募作品の鑑賞からは、鋭い感性が伺える。身近な言葉を繋いでいるという意味での語彙の広がりや若干希薄なもの、それがストレートな感情表現や情景描写を生んでいる点も指摘できる。

高校側では応募にあたり、俳句、短歌、川柳の創作における基本的な作法についての指導が行われる。国語科の教諭を中心に、表現やテクニックについてのレクチャーが行われていることは、想像に難くない。コンテスト主催側の大学としては、創作の場を提供するのみで、創作に関する指導を高校側にゆだねる形をとることになる。実際に、生徒に創作させるための動機付けや、完成にいたるプロセスに、膨大な時間が費やされていることであろう。その先の、鑑賞と評価については大学で引き受けようとするのが、このコンテストに関わる大学関係者の共通の想いである。

大学側では、それぞれの研究者の視点によって、受賞作品を選定する。大学がこのようなコンテストを主催する意義は、この研究者の視点による選定にある。例えば、短歌部門の選者で本学教授の下平武治、氏原基余司の両名は、それぞれ歌人や元文化庁の主任国語調査官である専門家の視点と、大学教育においては、作家や風土、短歌にみられる日本語表現といった研究をベースに、正しい日本語を使うための技術や鑑賞法について理論的な講義を行っている。俳句部門、川柳部門の選者も同様に専門家と研究者の両側面を併せ持つ。本稿執筆で、コンテストのとりまとめを行っている、マス・コミュニケーション学科長、佐藤毅教授

が展開するのは、「ことばと表現」「文章論」「現代文学鑑賞」などの授業である。大学ならではの教育の利点として、良い作品に触れ、それがなぜ人の心をつかむのか、なぜ魅力的なのかを鑑賞させ、そこでの実感を自己表現へとつなげることに注力することができる。こうした視点を持つ選者によって、毎年、多い時には5,000件を超す応募を一つ一つ丁寧に、鑑賞と評価に膨大な時間が費やされるのである。

そもそも高校と大学では、社会的に求められる教育目標が異なるため、どこに多くの時間を費やすかも、おのずと異なる。しかし高校での基盤がなければ、大学での専門教育は生きてこない。その意味で、本コンテストのように、高校での創作活動を、大学で鑑賞、評価する試みは、ある種の連携と考えることができる。表現を磨く場として有効に働く可能性を秘めていると考えられる。

#### まとめと今後の展望

本研究において見出した点は以下の通りである。

1. 応募総数が2万件を超え、毎年、団体投稿してくれるコンテスト利用のリピーター校が増加していること、大量の作品を応募する投稿者の存在が確認できた。
2. 本コンテストでは、大学が提供する創作の場に対し、高校では指導に時間を費やし、鑑賞、評価は大学で時間を費やすという、ある種の連携関係が成り立っており、表現を磨く場として有効に働く可能性が示唆された。

コンテストを接点とし、高校と大学が間接的に連携できる可能性について、実際の高校側の指導状況や、生徒の創作状況を、定性・定量調査で確認し、日本語力養成の観点からも意義のあるコンテストへと成長させていくことを、今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 秋山英治, 2013, 高大連携による日本語文章教育の取り組み, リメディアル教育研究第8巻第2号, 24-31
- 佐藤尚子, 2009, 大学生に必要な語彙力とは, 日本リメディアル教育学会第5回全国大会発表予稿集, 7-8
- 高松正毅, 2006, 日本人大学生の日本語教育—日本語変革への構想—, 高崎経済大学論集48巻3号, 213-222
- 塚越久美子, 2013, 北海道工業大学の文章表現教育, リ

メディア教育研究第8巻第2号, 211-215  
馬場眞知子・たなかよしこ・小野博, 2011, 日本人大学生  
の日本語力の養成について, リメディアル教育研究  
第6巻第1号, 3-5

林香織・佐藤毅・廣田有里, 2013, 高校生の語彙使用に  
関する一考察—「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」  
応募作品の分析をもとに—, 53-58